JVC
Japan International Volunteer Center

333 | 2018 秋

［¥500］年4回発行

TRIAL & ERROR

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）

［特集］JVC国際協力コンサートの終了

ボランティアが続けた30年間の活動を振り返る

［報告］朝鮮民主主義人民共和国出張報告

何があっても途絶えさせない日朝の民間交流

［報告］ガザに緊急支援を

非暴力デモで手足が失われる

［報告］カンボジア総選挙

経済成長と強権政治の影響下にあるカンボジア

JVC国際協力コンサート、その最後の年の東京公演の舞台に立つJVC合唱団員の皆さん。30年前に一人の呼びかけで始まったこのコンサートには、その運営にこれまで数多くのボランティアが関わってきた。その代表格が、「歌声ボランティア」である合唱団員。大阪公演はコードリベット・コールが、東京公演は毎年募集して構成するJVC合唱団が担っている。

ボランティアが続けた30年間の活動を振り返る

1989年から毎年末に開催した「JVC国際協力コンサート」は
今年末の公演で30年の歴史に幕を下ろす。
30年間のコンサートは多くのボランティア――歌う人、
音楽家、実行委員会、裏方等々――に運営されたという
財産を残し、同時にボランティアの一人一人にも財産を残した。
惜しまれての終了に向かいつつも、関わった個人や
組織の立場からコンサート活動の意義を整理したい。

国際協力コンサートの終了を新たなステップに

JVCコンサート事務局　石川 朋子

「試しにやってみよう」から始まった年末恒例のJVC国際協力コンサートは、実に30年も続けられてきた。様々な社会環境の変貌に伴い本年末に終了を迎えるが、ここにその変遷を整理する。同時に、ボランティアだけで30年も実践したその「精神」をここで絶やせないと、今回の終了を新たなステップと考え、新しい合唱団をつくる動きも紹介したい。コンサート活動は、それに関わる人と人とを結び付けていたのだ。

JVCの活動を応援したい

JVC国際協力コンサート（当初の名称は「JVCベネフィットコンサート」）が始まったのは1989年。

時はバブル景気真っ盛り、12月の日経平均株価は東証平均史上最高値を記録し、日本でもメセナ（企業の文化・芸術活動支援）活動が急速に広がり始めたタイミングであり、昭和が平成になった年です。

コンサートが始まったきっかけは、ボランティアの一人、アイネス・バスカビルさん（現JVC顧問、米国在住）の「JVCの活動を応援したい」というシンプルかつ、強い思いでした。

当時、アイネスさんは「国際難民支援会（RIJ）」のボランティアで、RIJのための支援コンサートを開催していて、JVCを知るきっかけは、RIJの支援先にJVCが選ばれたことです。アイネスさんは「支援したお金がどのように使われるか

2013年東京公演。ステージリハーサルを終えたアイネスさん。

自分の目で見る」ことをポリシーとしており、支援先となったJVCソマリアの活動の視察に行きました。1984年のことです。

ソマリアの活動地ルークで、現地の人への命令ではなく、その声に耳を傾け、一緒に活動するJVCスタッフの働きに強く心を打たれたアイネスさんは、「この日本人の働きをもっと日本の人に伝え、応援してもらいたい」と、JVCのためのコンサートを発案したのです。

演目が宗教曲『メサイア』ということで、JVC内では「なぜJVCがキリスト教の曲を?」と議論になりましたが、当時の事務局長、星野昌子さんの応援もあり、「試しにやってみましょう」と、JVC国際協力コンサートは誕生しました。アイネスさんと20名近いボランティア「JVCコンサート実行委員会」が実質の「主催者」としてコンサートをつくってきました。

大阪公演は、東京公演について書かれた朝日新聞の「天声人語」(92年11月19日)を読まれた猪俣寛彦氏のお声かけで94年に始まりました。

2013年、コンサート実行委員会、コンサート関係者

JVCが合唱団を運営する

コンサートのコンセプトは「音楽で国際協力」。

歌いたい人は合唱団員として、企業は協賛することで、音楽家は「Talent(能力)とTime(時間)をDonate(寄付)」(アイネスさんは音楽家への出演依頼に、このようにお声かけしていた)し、音楽

JVC国際協力コンサートのこれまで

1989年	アイネス・バスカビルを中心に『JVCベネフィット・コンサート』が東京で始まる。楽曲はヘンデル『メサイア』。
1992年	朝日新聞「天声人語」で東京公演が紹介。
1994年	「天声人語」をきっかけに大阪公演開始。公演名を「JVC国際協力コンサート」に変更。
1997年	89年以降、初めて『メサイア』以外の曲、J.S.バッハ『クリスマス・オラトリオ』を演奏（大阪公演）。収益が最高額の14,500,000円に到達。
2004年	JVC合唱団設立。運営責任者に柴大元氏、合唱指揮者に青木洋也氏が就任。
2006年	東京公演でもJ.S.バッハ『クリスマス・オラトリオ』（全曲）を演奏。
2013年	25周年を機に創設者アイネス・バスカビルが、コンサート実行委員長を退任。
2014年	青木洋也氏JVC国際協力コンサート音楽監督就任。
2018年	東京公演30年、大阪公演25年でフィナーレを迎える。

を聴きたい人はチケットを買う。他にも当日ボランティアが「国際協力に参加しましょう」と呼びかけたものです。

今でこそ、「国際協力＋α」の視点で、国際協力以外の何かと組み合わせることで、国際協力への参加を促す試みは一般的になっていますが、NGOや国際協力の認知度も現在とは比較にならないほど低い時代、日本のNGOが主催する「国際協力＋音楽」のクラシックコンサートを企画したアイネスさんの先見性を感じずにはいられません。

順風満帆の船出となったコンサートは、バブル崩壊後も97年の最高収益1450万円までは順調に協賛企業とその支援額を増やしていきました。しかし、「平成不況」、「失われた10年」と言われる不況の影響を受け、その後企業協賛は減少し、コンサート事業は「経費削減」、「収益回復」が喫緊の課題となりました。

私がJVCのコンサート担当になった2002年はそのような時期でした。企業へ支援のお願い電話をかけると「あのねぇ、こっちはリストラしてるんですよ。寄付してる場合じゃないんだよ！」と言われたことも1度や2度ではありません。営業とはかくもつらいものかと思っていましたが、その後も数多く断られる中で、当時ほど「怒られる」ことはなくなり、それだけ厳しい不況だったのだと、今はわかります。

「収益回復」案の一つは「JVCが合唱団を運営する」でした。

東京公演の合唱団は、初回から郡司博先生（指揮者、合唱指導者）が運営、指導すべてを担当してくださっていましたが、この案はその郡司先生からのご提案でした。

ところが、「合唱団運営など、素人のJVCにできるわけがない」、「郡司先生なしでは絶対にコンサートは続かない」など、内輪のJVCやコンサート実行委員会から反対や不安の声があがりました。

さわさりながら、他に選択肢がない状況でもありました。議論を重ね、結論も行ったり来たりする状況の私たちが、星野さんに相談した際に言われたのが次の言葉です。

「今がベスト、もう完璧、と思った時点でその団体（活動）は硬直する。もっと良くなるには？と常に考えることが大切。創造的混沌はその時々において必要なこと」

この言葉が、変えることの不安で立ち止まっていた私たちの背中を押してくれました。04年、「JVC合唱団」が事務局責任者として柴大元氏、指導者に青木洋也氏を迎え設立されました。このJVC合唱団は、「音楽で国際協力」の特徴をさらに強めてくれました。

2018年9月末のJVC合唱団合宿、練習風景

収益の回復見込みを立てられず、終了へ

JVC国際協力コンサートは、今年12月の演奏を最後に終了します。「コンサート終了」。その決定までの話し合いが始まったのは15年末でした。会場や出演者の調整のために、16年度内には方向性を見出す必要があります。JVC内部の議論とともに、柴氏、青木先生、大阪の合唱団コードリベット・コール他、コンサート関係者などにもアドバイス

を聞くなど、話し合いを進めました。

正確には、13年、アイネスさんが実行委員長を引退した年から、この議論は始まっていました。創設者であり、コンサート実行委員長としてリーダーシップ、カリスマ性をもってコンサートを牽引していた彼女の引退後、「JVCはコンサートを続けられるのか?」との声が聞こえてきました。

議論においては、スタッフから「アイネスさんが辞めるからといってやめるのは違う。JVCのコンサートとして続けていきたい」、「コンサートがあるからつながれる人がいる。コンサートはJVCの宝」などの声があり、「続ける前提」で確認作業が行われました。そして決めたのが、いくつかの「継続の条件（支援企業数、収益、先の見通しなど）」を設定し、まずは「次の周年まで5年続けよう」ということです。

15年からの議論は、具体的な「継続条件」や数字を出して進めました。だが目指す収益には到達せず、その解決案も浮かんでは消えていきました。割引をもってコンサートを支援くださっていた両ホールからも、現条件維持が難しいことが伝えられました。一方、数字だけではない広報的なコンサートの価値、JVC内でのコンサートの存在の大きさは、決断をさらに難しくしました。

予定以上に時間はかかりましたが、東京公演は17年5月、大阪公演は10月末に終了を決定しました。主な理由を一言でいうと「収益の減少」になりますが、コンサートを取り巻く環境も変化し、JVCに今の収益を回復させコンサートを維持していく力はありませんでした。

新しい合唱団をつくる！

コンサートのテーマの一つは「ボランティア精神」です。コンサートを始めたのが、ボランティアのアイネスさんと約20名のJVCコンサート実行委員会であったように、この30年、東京と大阪でコンサートを支えたのはすべてボランティアでした。

JVCは「ボランティア」を「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」と定義し、団体名にも使っています。合唱団員は「歌声ボランティア」、当日の裏方は「当日ボランティア」、コンサート実行委員会、本当に数多くのボランティアがこのコンサートをつないでくれました。

コンサートは、これまで2億6000万円超ものお金をつくってきましたが、それ以上の財産が、このコンサートを通してJVCを応援してくださっている「人」です。コンサートの終わりが決まり、この「人」とのつながりをどう維持していけるかが最重要課題となっています。

その模索のなか、合唱団関係では、次のタネがまかれようとしています。JVC合唱団の有志数名が、「国際協力のために歌う」というスピリットをつないでいきたい、と、新しい合唱団（名称未定）作りに動いています。コードリベット・コール（大阪の合唱団）は、今回のフィナーレを「JVCが新しいつながりを作るための区切り」とし、自主公演との連携を考えてくれています。ボランティア精神は、受け継がれていきます。

フィナーレのコンサートは、間もなく開演です。古楽の本場オランダで、世界最高峰の古楽アンサンブル「オランダ・バッハ協会」の音楽監督を35年務められた巨匠ヨス・ファン・フェルトホーフェン氏が来日します。JVCのコンサート史上、最も再演が待ち望まれた指揮者です。最後の演奏をステージと会場のみんなで一緒につくりましょう！ ぜひご来場ください。

JVC国際協力コンサート 2018

チケット好評発売中

30周年記念 東京公演

ヘンデル『メサイア』（全曲）

2018年12月1日(土) 昭和女子大学人見記念講堂 15時開演

[SS券]10,000円 [A券]~~5,000円~~完売 [B券]4,000円 [C券]3,000円

25周年記念 大阪公演

バッハ『クリスマス・オラトリオ』（第1－4部）

2018年12月8日(土) いずみホール 14時開演

[SS券]10,000円 [A券]5,000円 [B券]4,000円

ＪＶＣ国際協力コンサート ２０１８に寄せて

いよいよ本年末で終了となるＪＶＣ国際協力コンサート。ＪＶＣの活動を支援する目的で始まったコンサートも、続けるうちに様々な人と人との出会いを紡いできた。長年携わっている人びとのなかには寂しさもある一方で充足感もあるようだ。それぞれの思いを語ってもらった。

ＪＶＣ国際協力コンサート２０１８に寄せて

ヨス・ファン・フェルトホーフェン（指揮者）

ＪＶＣコンサートに指揮者として招待されるのは、今回3度目になります。

このコンサートは、ＪＶＣの1980年の創設以来の目標――人びとが互いに調和して暮らし、紛争の犠牲者を救うために貢献する――を実現する大きな助けとなるでしょう。

この重要事業を支えるための来日は、私にとりまして大いなる栄誉であり大変光栄に思います。ＪＶＣの素晴らしい目標の達成に向け、人びとを刺激するのに最もふさわしいものは、人の心へ直接響く音楽以外にあるでしょうか？

私は、バッハの音楽と、ヘンデルのように、彼と同時期に活躍した作曲家たちの音楽を学ぶことに生涯を捧げてまいりました。そして、18世紀のこの古楽が、依然として、実に人びとを動かし、美しさ、強さ、快適さ、そして喜びを与えうる絶対的な強さと能力をもっていることに気付きました。『メサイア』と『クリスマス・オラトリオ』は、この古楽のなかでも最高の作品であり、クリスマス前の数週間がこの音楽を演奏するのに最適な時です。

私のホーム・アンサンブルはオランダにあります、オランダ・バッハ協会です。もし、私の音楽人生にご興味をお持ちいただけましたら、All of Bach.comをご覧ください。ここでは、バッハの２５０曲以上の作品を無料視聴できます。これらは、ヨーロッパの最も素晴らしい音楽家によって、最も美しい場所で録音されました。

地球上の人びとのハーモニーは、私たち音楽家が音楽を演奏する時、ステージ上で感じるハーモニーとよく似ています。バッハとヘンデルは、大いなる情熱と思索を作品に吹き込むことに成功しました。私たち音楽家は、それらを２０１８年の現代に蘇らせる責務を覚えています。到底簡単にできることではなく、多くの才能、献身、準備、リハーサルが必要とされます。

しかし、それらが成功し、その音楽が人々の心に染みこむとき、言葉に頼ることなく、より良い世界の実現につながるすばらしいハーモニーが生まれるでしょう。私たちがヘンデルの『メサイア』とバッハの『クリスマス・オラトリオ』を演奏するコンサートホールにおいても。また、ＪＶＣが人々の〝ハーモニー（調和）〟に取り組んでいる世界においても。

ＪＶＣのクリスマス

秋田 美喜子（合唱団員・大阪）

Jauchzet, frohlocket!（歓びの叫びをあげよ！）

　この歌詞から始まる『クリスマス・オラトリオ』。私は、大阪の合唱団「コードリベット・コール」に入団し、この曲を最初に練習した時、「なんて乱暴な曲だろう」とびっくりしたものです。だっていきなりソ（G）の音で、Jauchzet!って叫ぶんですよ。それまで、マタイ、ヨハネ、ロ短調ミサを歌っていた私にとって野蛮な曲でした。

　それがヨスさんに指揮して頂いた05年、Sinfoniaを聞いていたら突然目の前に平原と羊の群れが現れて、感動！　その時から、この曲は私にとっても特別なものとなりました。

　ＪＶＣ国際協力コンサートにこの曲が取り入れられたのは97年。我がコードリベット・コールにとって最高の喜び。この曲は我が団が67年より毎年歌い継いでいた曲だったからです。団員はほとんど暗譜しており、息をするように歌っています。

　そんな私たちにとって大切な曲、電話帳のように重たい楽譜とも今年でお別れ。最後の『クリスマス・オラトリオ』でヨスさんをお迎えできたことに感謝と喜びで一杯です。

　ＪＶＣの音楽を通じて世界の人たちとつながれるという素敵な企画、このコンサートも今年でフィナーレ。最後で、最高のクリスマス。ぜひホールで一緒に迎えましょう！皆さんのお越しを心よりお待ちしております。

ＪＶＣ会員として合唱団員として

奥野 千恵子（合唱団員・東京）

女学校の同窓会での星野昌子ＪＶＣ初代事務局長（4年ほど後輩）の講演がＪＶＣとの出会いでした。

　発足当初のご苦労を経て、現地の実情を読み取ったうえでの息の長い援助の方策を探りとり、それを実現していることにすっかり魅せられ、程なく会員になりました。

　私自身の当時の事情もあり、10年ほどは機関誌（T&E）を読むだけでしたが、04年初頭、同誌に載ったＪＶＣ合唱団員募集で「歌ってボランティアができる」と、すぐ申し込みました。ちょうど時間的に余裕ができた時期で、『メサイア』はかねて歌ってみたいと思っていましたので。

　といっても、特別の素養はなく、ただ合唱のハーモニーのなかで歌うのが好き、というだけのド素人で、初めの頃は経験豊かな方々のそばで耳から覚えさせていただき、15年が経ちました。

　この度、このコンサートがフィナーレを迎えるにあたり、発案されたアイネスさんはじめ、ご指導や伴奏の先生方、また、団員の目に見えないところで運営などの苦労を重ねてくださった多くの方々のおかげで、楽しく歌わせていただけたのだということを想い、心からの感謝を申し上げます。これに報いるためにも、この最終回を最高の『メサイア』で飾らねば、と強く思っております。

　昨年、「14年間で最高だった」と評した友人にさらに上の『メサイア』を届けたいです。さらに、練習の日々のなかで、多くの心優しい方々と交流でき、また、お世話になったことは、またとない幸せであったとありがたく心に刻んでおります。

いまさら聞けないQ&A Vol.11

読者のみなさんからの 質問募集中!! 会員担当:宮西までお寄せください。

アドボカシーの活動には、一般向けのイベント[左上]や議員を招いての院内勉強会[右上]、署名活動[左下]などもある。右下は、2017年2月に衆議院予算委員会に公述人として招かれた際の写真

Q 「アドボカシー」とはなんですか?

A 政府や自治体の政策に対して、対話やメディアによる世論喚起など直接/間接に影響をもたらすことで、政策の形成や変更を促すこと。「公共」を担う政府の行動に対して、市民が関われる方法のひとつ。

直訳すると「唱道する」こと。ここから一般的に、「政策提言」や「権利擁護」などの意味で用いられたりします。つまり、政府や自治体などの政策に異議を申し立てたり、影響をもたらして、新たな政策の形成や変容を促すことです。政府という組織は一義的に公に責任をもつことから、どうしても多数者意見に偏ったり、変動する社会環境への対応が遅れたりして、政策の恩恵を受けられず結果として不利益や不安全を被る人々を生み出してしまうことがあります。

JVCが活動する国際援助や開発の文脈で言うと、日本政府は自国企業の海外進出を助けるために、ODA(政府開発援助)を使って経済インフラの整備ばかりを行う傾向がありますが、時にはそうしたプロジェクトが地域住民の生活を脅かすことがあります。例えば、1990年代初頭、長い紛争を終えたばかりのカンボジアで、日本政府は農業支援と食糧増産を名目に農薬や化学肥料を送り込もうとしました。しかし、日本が国交を持つ以前、80年代からカンボジアで活動してきたJVCは、現地の事情を鑑みて、地域住民には化学肥料や農薬を受容するキャパシティがなく、むしろ健康被害や環境破壊をもたらす危険性があるとして、国連などと共に日本政府に援助内容を見直させました。具体的には、農薬援助の不適切さを、現地農村社会の状況や科学者・専門家による危険性を指摘する意見に則ってメディアやNGO同士のネットワークを活用して広く日本社会に訴えたのです。また、外務省の担当者などとも話し合う場を持ち、問題性を直接訴えました。

このように、アドボカシーではその政策決定に権限を持つ対象(各省庁など)に対して、様々な方法(対話などの直接的方法やメディアやキャンペーンによる世論喚起という間接的な影響力の行使など)を複合的に用いることになります。従って、誰に対して、どのように働きかけることが効果的かを分析して戦略を立てることが大切で、そのためには関係者の洗い出し(ステークホルダー分析)やその力関係(パワーアナリシス)の検証が重要です。また、アドボカシーの最終的な目的は政策の変更ですから、どの政策のどの部分をどのように何を変えるべきなのか、何が変えられるのかといった適切かつ現実的な目標設定が、最初にやるべき最も大切な作業です。その上で、政策変更という時間とリソースのかかる活動を効果的かつ効率的に行うために、外部協力者の選定や自組織側の強みと弱み、効果的な機会やチャンスはどこにあるか、逆に制約的な要因はないか、といったSWOT分析も不可欠になります。

今でこそ、一部の企業は社会的責任として人権や環境に配慮するようになってきています。しかし、その一方で多くの企業はまだまだ経済成長至上主義で、そのためにむしろ政治を主導して、自分たち企業活動に都合の良い政策となるように政府に働きかけたり、消費者からの反感を和らげるために政府による「社会的信用」というお墨付きを得ようとする傾向も見られます。

より良い社会をつくるために私たちひとり一人が積極的に社会に働きかけることは大切で、その意味で、来たるべき未来における「公共」はどうあるべきか、そのための政府の役割とは何かを考え、行動し、参画できる場として、NGOやNPOが行うアドボカシーはますます重要になってくるのではないでしょうか。

JVC専門アドバイザー(政策提言) 高橋 清貴

スタッフのひとりごと

イラスト　かじの倫子

いっしょに笑いたい!

人道支援／平和構築グループ担当　大澤　みずほ

JVC東京事務所には色々な言語を操る人たちがいます。「これを機にアラビア語を勉強しよう」と思っていたところに思わぬ機会が！パレスチナの現地事務所で２ヵ月間短期駐在することになったのです。もちろん､現地で使う言葉はアラビア語。

JVCに入る前、私は青年海外協力隊として２年間、南米のパラグアイに派遣されていました。パラグアイではスペイン語とグアラニー語という２つの公用語があります。スペイン語だけでもまったく生活や活動に支障はないのですが、パラグアイ人は両方をミックスして喋り、田舎に行けば行くほどグアラニー語の割合が多くなります。

私の派遣地はけっこう田舎で、まわりのみんながグアラニー語で話していてゲラゲラ笑っているのを見て、「タイムラグなく一緒に笑いたい！」と思い、いつもメモを片手に「今なんて言ったの？」「これはなんて言うの？」と聞いて回っていました。少しでもグアラニー語を話すと、みんな笑って喜んでくれて（時に爆笑され）、嬉しかったのを覚えています。海外の人が日本語で話しかけてくれると嬉しいですよね。

言語を知ると、言い回しや使う単語などから、その人たちの考え方や文化も知ることができてすごく面白いです。ここパレスチナでも、ほんのちょっとアラビア語の単語を使うだけで喜んでくれるので、楽しく勉強しています。まだまだ学びたい言語はたくさんあるのですが、今はこの機会にアラビア語をがんばろうと思います。

コネタにゅーす　活動地雑学

オシャレは指先から？ スーダン流おしゃれ術

人道支援／平和構築グループ担当　山本　恭之

ムスリム女性が頭につける「ベール（ヒジャブ）」。テレビなどで目にしたことがあるかと思いますが、あのベールにも様々な種類があるということをご存知でしょうか？ブルカ、チャドル、ニカブ等々…

今回は､スーダンの伝統衣装「トーブ」を紹介します。４～５メートルほどの布を頭からつま先まですっぽりと覆う形で身にまといます。ただの布とあなどる事なかれ。赤、黄色、緑など色鮮やかで眩しいほどに綺麗な布によって、スーダン人女性の美しさがさらに際立ちます。普段の外出着から正装まで、色や柄によって幅広く使い分けられるのもトーブの特徴のひとつです。

さらに、スーダン人女性がするオシャレに、指先や足先に施すタトゥーがあります。ヘナ（ヘンナ）と呼ばれる植物を使用したタトゥーを、結婚している証として指先と足の甲や裏に施します。未婚女性は指先ではなく腕にするそうで、繊細で丁寧に描かれた模様がめちゃくちゃかっこいい！タトゥーと言っても10日程で色が落ちるので、何度でも違うデザインを楽しむことができます。

伝統的な結婚衣装を身にまとい、ヘナを手足に施すスーダン人女性

現地でヘナ着色剤を買って、私も帰国後に挑戦してみました。スーダンで見たあの綺麗な模様とはほど遠いぐちゃっと潰れた「花」が10日間、私の足の甲に咲いていました。オシャレって､ムズカシイんだなぁ。

和やかながらも日朝問題にまで言及し、厳しい意見も飛び交った座談会

［報告］朝鮮民主主義人民共和国出張報告

何があっても途絶えさせない 日朝の民間交流

今年、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）を巡り、南北首脳会談と米朝首脳会談が開催され朝鮮半島の和平実現への期待が膨らんでいる。この緊張緩和を受け、『南北コリアと日本のともだち展』（注1。以下、『ともだち展』）は8月、2年ぶりに日朝の大学生交流を実施。双方14名の話し合いは、ときに「日本はまず謝罪せよ」との厳しい意見も飛び出したが、学生たちはそれぞれの意見の違いを共有できたことに意義を覚えた。交流は今後も継続する。

広報グループマネージャー／コリア事業担当
宮西 有紀

緊張状態の薄れたなかでの訪朝

8月21日から28日、『ともだち展』実行委員会の訪朝団として、子どもの絵画交流と日朝大学生交流の実施のため、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）を訪問した。訪朝団は、大学生6名に加え、研究者やジャーナリストを含む17名。

昨年は米朝関係が緊張し、日本国内では「北朝鮮の脅威」が盛んに報道され、大学生交流は断念した。だが2018年、情勢は一変した。4月の南北首脳会談、6月の史上初の米朝首脳会談の開催で、朝鮮半島での平和実現に期待が膨らんだ。

事実、今年5月、事前協議での訪朝で、平壌外国語大学（以下、外大）も「（平和ムードの流れを受け）今年は交流事業に積極的に参加したい」と非常に前向きなことも、2年ぶりの大学生交流につながった。

また、今年は、例年同時期に行われる米韓軍事合同演習もなかった。パートナー団体の担当者の「今までで一番いいときに訪問されました」との柔らかくも短い一言に「緊張状態がなくなる」ことへの安心と期待の大きさが滲み出ていた。

率先する教師。手紙を書く子どもたち

『ともだち展』絵画交流のため、今年も平壌市内の2つの小学校（ルンラ小、チャンギョン小）を訪問。昨年の絵画交流に参加した子どもたちには、参加賞と日本からのメッセージを手渡した。

ルンラ小では、生徒たちが、私たちと時を同じくして訪朝した朝鮮学校の生徒とともに、18年度の共同制作「わたしのまちにおいでよ」を実施。子どもたちは朝鮮の名所――白頭山、主体思想塔、大同江遊覧船な

◎注1…「南北コリアと日本のともだち展」2001年より実行委員会形式で開催する、日本と朝鮮、韓国の子どもの絵画展。実行委員会は、KOREAこどもキャンペーンのほか、在日本韓国YMCA、地球の木など9団体で構成。絵とメッセージの交換を通しての「出会い」が目的で、日朝・日韓間の直接訪問をした子どもも延べ約300名を数える。朝鮮側では「朝鮮対外文化連絡協会」が平壌市内の小学生の絵を提供する。平壌のルンラ小学校で02年より絵画展を開催してきたが、日朝関係の悪化により07年からは交流会のみを行ない、14年に一時的に再開した。

どー—を描いて、作品を仕上げた。

また、訪朝団は、朝鮮学校が主催した展示会や交流会にも同席したが、参加した30名ほどのルンラ小児童の前で先生方が率先して展示物の紹介をする姿に、改めて『ともだち展』は、日本国内の実行委員会だけではなく、多くの方の協力なしでは実施できないと感じた。

日本の子どもたちの絵も机上に置き紹介すると、子どもたちは、「もっと見せて」、「この絵が好き」と先を争って見入っていた。そして、自分から「（日本の子どもに）手紙を書きたい」と希望する子が見受けられた。同行した大学生からは、「絵画交流には大きな意義がある」、「もっと前から絵画展を知り、作品を見ておきたかった」などの声をもらった。

まだ見ぬ日本のともだちを想像しながら手紙を書く平壌の子どもたち

平壌外国語大学で初対面した日朝の大学生たち

一日過ごして親睦が深まり一緒に自撮りする日朝の大学生たち

大学生の友好、葛藤、そして目的

今年の大学生交流は3日に分けて行われ、平壌学生8名、日本学生6名が参加した。

初日は外大訪問。日本の学生の自己紹介のあと、すぐにグループに分かれて交流がスタート。外大生は初めて会う日本人に緊張が隠せない様子だったが、なかには政治問題に関わる話（戦後賠償や竹島など）をするグループもあり、穏やかながらも話は弾んでいたように思う。

翌日は、市内見学をしながらの交流を実施したが、仲良くなりたいのに、一緒に過ごす時間が増えると、「体制の違い」や「意見の違い」から、どうしても自分や日本を理解してくれないことに涙を流して葛藤する日本人学生も現れた。

最終日は、龍岳山に登り、車座で一緒に弁当を食べた後、3つのグループに分かれ、「信頼関係を築くに必要なこと」をテーマに、「個人と個人との信頼醸成」、次いで、「日本と朝鮮との信頼構築」に関して意見交換を行なった。各グループには、訪朝団から一人がファシリテーターに入り、外大生のサポートとして訪朝団の通訳にも加わってもらった。

厳しい意見交換になり、「個人と個人の信頼関係を築く前に、まずは謝罪を」との朝鮮側の意見に対し、日本の学生は「友人でいたいのに、朝鮮の学生が抱く日本に対する深い憎しみに触れると、分かり合えず悲しい気持ちになった」との声を漏らす。しかし、各グループでの意見交換を経て、「人と人の関係から国と国の関係に発展する」、「各国で歴史の教え方が違う。だから、ほかの国の話をもっと聞くべき」といった意見にまとまった。

最後に、訪朝団メンバーで平和研究者であるNGO「ひろしま」の水本和実理事が「信頼関係構築には、まず自分が得た情報は本当に正しいのか。そこから始めるのが重要」とコメントし、座談会を締めくくった。

直接会わなければケンカもできない

3日間の交流を終え、外大生からは「私たち大学生に一致した理念と共通点がある限り、国交正常化は必ず来ると信じています」、「日本と日本語について本当に勉強になりました。次の交流も期待しています」といった感想が出た。

日本の学生からも「すぐに話ができるような関係づくりをしなければいけないと思ったし、そのために何をすべきかを考えていきたい」、「朝鮮にも朝鮮の大学生の生活や考え方があって、それをこの3日間で感じられたことは、自分にとって大きい経験だった」という感想があった。

「直接会わなければケンカも出来ない」とパートナー団体の担当者が言ったとおり、人的交流は何があっても途絶えさせてはいけない。私たちは、この活動を広げていけるよう働きかけていきたいと思う。

デモで腕や首を負傷し、はっきりと意識が戻らないままの状態の青年。
家族が彼の耳元でコーランの詠唱を流していた。「返事はできないけれど、
クルアーンを読み上げる音を認識することはできる」と母親は言う

［報告］ガザに緊急支援を

非暴力デモで手足が失われる

米大使館がエルサレムに移転された5月14日以降、ガザの人々が毎週末行っていた抗議デモは今では毎晩実施されている。だがガザの病院では、足の切断手術や、一日のほとんどで人工呼吸器の取り付けを余儀なくされる患者が増えるばかりだ。JVCはこれら患者の治療とリハビリのために支援金の寄付を呼び掛けている。

エルサレム事務所現地代表
山村 順子（よりこ）

涙でテレビを直視できない

5月14日、私の携帯電話は鳴りっぱなしだった。ガザの人々による大規模デモがガザとイスラエルの境界付近で行われ、数多くの犠牲者が出ているという速報が絶え間なく流れたためだ。

テレビ画面に目をやるたび、犠牲者数は増えた。その日は米大使館がエルサレムに移転される日であり、移転祝賀式典とデモの様子がテレビの画面を分けて中継されていた。

デモは「70年実現されない難民の帰還権の再提起」、「封鎖下での困窮状態からの脱出」、「米大使館エルサレム移転への抗議」のために行われ、人々は境界に向かって歩いていた。その非暴力の訴えもイスラエルのスナイパーによって次々に打ち砕かれ、援助関係者の我々も涙で画面を直視できないほど、耐え難い現実に直面した。（注1）

ワファ病院との出会い

ガザでのデモは毎週末続き、女性・子ども・医療従事者・ジャーナリストまでもが狙撃された。負傷者数が増加し続ける非常事態に対し、JVCはガザ最大規模の公立シファ病院で聞き取りを行った。そこでは、デモで脚を撃たれた多数の人々が、脚の切断（注2）を迫られ、障がいを負い、当病院で手術を受けた後、リハビリを要している事実を知った。

そして、ガザで唯一包括的にリハビリ医療を提供しているエル＝ワファ病院は慈善団体が運営しており、より支援が必要とのことだった。

首を撃たれ呼吸器を付けられた男性は昏睡状態で、横にいる母親が彼の耳元でコーランの詠唱を流していた。

◎注1…UNOCHA（国連人道問題調整事務所）によれば、3月30日〜9月6日で1万9014人がデモで負傷、179人が死亡した。
https://www.ochaopt.org/content/humanitarian-snapshot-casualties-context-demonstrations-and-hostilities-gaza-30-march-6　◎注2…WHOによれば、3月30日〜8月13日で、切断された人数は74人。

ワファ病院のスタッフ。右の二名がリハビリ担当。この病院は多様な器具を揃えており、様々なリハビリを受けることが可能。専門的な指導を受けられる。

電力不足のガザの病院では、一時間に140リットルもの燃料を要する発電機が命綱だ。2014年のガザ戦争時から入院している患者もおり、ガザがまだ先の戦争から復興していないことを再認識した。また同病院には、古い電気機器の使用、そして停電による不安定な電流によって感電し、植物状態で入院する人もいる。病院にとどまらず、ガザでは、同様の理由で、洗濯機の使用や電気工事など様々な場面で感電死の恐れがある。JVCのパートナー団体、AEI（注3）にいた男性も、むき出しの配線に触れて感電し、新婚で昏睡状態になった。

ワファ病院からの要望 ～何のための支援金なのか～

病院からは、まずは薬剤と呼吸器を購入したいとの要望があった。

デモでは首の神経を狙われ負傷するケースも多く、人工呼吸器を24時間要する患者がいる。その人工呼吸器が高価であり、古くなって壊れそうでも買い換えられないためだ。

そして、デモの負傷者は脚の切断で激痛に苦しみ、患部が化膿する危険もある。痛み止めと抗生物質が不可欠だ。また、当病院は病院職員に給料が支払われていない状態でも、生活困窮者から治療費を受け取っていない。封鎖による貧困で日々食べるものにも困る者も多く、負傷者のいる家庭はさらに困窮するためだ。

当病院は負傷者が自立した生活を送ることを目指してリハビリを行う。一度に45人まで受け入れ可能だが、常に入院希望者が待機している。病院に同行したAEIのアマルさんは、「大病院もキャパシティ不足。最低限の治療を施し、すぐに退院させる。リハビリ病院の担う役割は大きい」と語る。

患者へのインタビュー

呼吸器を付けて入院しているガザ東部出身のアリ君（仮名、16歳）は、大好きな欧州のサッカークラブのタオルや服に囲まれてベッドにいた。彼は6月1日に、弟と一緒にデモに参加して負傷した。

難民である彼は、故郷であり現在はイスラエル側になってしまったヤッファに帰りたくてデモに参加したという（注4）。

病院関係者は、「人工呼吸器の電源が不安定になると精神的にも不安定になるので、心理的なケアも行う。彼はまだ幼くてこの怪我の意味を理解していない。家族もいつまでも彼の側にはいられない。でも、リハビリを続けたら自分で道を切り開くことも可能になる」と語った。

現在、病院は、すでにJVCが送った支援金の50万円を、病院に必要な機材の購入に充てる準備をしている。良質で安価な製品を購入するため、入札で業者を決定する。購入までに30～45日かかり、近日中にも院内委員会で業者を決定する。今後は、200万円を目標に寄付の呼びかけを継続する。

好きなサッカーチームのグッズに囲まれるアリ君（仮名）。呼吸器とは24時間共に過ごす生活だ（顔はプライバシー保護のためにぼかしてあります）

アリ君の人工呼吸器。資金不足で買い換えられないが、電気不足で不安定になることも多い

沈黙する国際社会に発信を

現在、週末のデモへの参加者の人数は安定しつつも、継続されている。またそれに加え、最近は夜も毎晩、若者を中心にデモが実施されている。人々は「自分たちだけ手足を失い、国際社会は沈黙したまま、何も得られない」と、孤立感を深めている。

また、故郷を去る人も増えている。彼らは借金をしてエジプト国境からトルコへ渡り、そこから船で違法に渡欧する。「欧州には期限付きのキャンプがある。人としての生活、尊厳もある。でもここは無期限の監獄よ」とガザの20代女性はため息混じりに嘆く。ガザの人たちが自分たちの故郷で人間らしく生きられるよう、継続的な支援はもちろんのこと、この非常事態を変えるための発信が必要とされている。

◎注3…JVCパレスチナ事業のパートナー団体であるArd El Insan（AEI：人間の大地）のプロジェクトマネージャー。
◎注4…イスラエル・テルアビブ（イスラエル、人口第二の都市）近郊にある。今でもアラブ人が多く住むが、多くのアラブ人はイスラエル人の入植に伴い、追い出された。

選挙前には、キャンペーンとして大々的なパレードも実施された。
掲げている旗は与党であるカンボジア人民党のもの（JVC活動地近くの村で撮影）

［報告］カンボジア総選挙

経済成長と強権政治の影響下にあるカンボジア

この夏、最大野党不在のなかで総選挙が行われたカンボジア。与党が全議席を占めるという選挙結果もあって、国際的な非難を浴びている。経済成長を遂げつつあるが、強権的な政権の動向も漏れ聞こえてくるカンボジアについて、NGOの立場から報告する。

事務局長
長谷部 貴俊

「自国に帰りたくない」

「今のカンボジアはポル・ポト時代と変わらないね」「カンボジアには戻りたくないよ。自分のフェイスブックも見られて、なにを監視されるかわからないし、自由はないね」

今年、たまたま遊びに行った食事会で私が会ったカンボジア人の方たちが、ふと口にした言葉でした。前職のNGO時代にカンボジアに2年間駐在していたこともあり、カンボジアを懐かしく想うときも多く、たびたび日本に住むカンボジア人のイベントや交流会に顔を出してきました。もちろん、現時点でもカンボジアの現政権を支持する人もいますし、この十年間で経済発展の恩恵を受け生活がとてもよくなったプノンペンに住む知人もいます。しかし、冒頭のような気持ちをこれまで日本で聞いたことはまったくなかったので、正直驚きました。切実な気持ちの現われなのかもしれません。

２０１８年7月29日、強制解党をさせられた最大野党であるカンボジア救国党が不在の中、第6回目の総選挙が行われ、フン・セン首相率いるカンボジア人民党が全議席の125席獲得という形になりました。これに対して、国際社会から大きな批判を浴びています。特にここ数年間、カンボジア国内では野党勢力のみならず、市民団体やメディアへの締め付けは非常に厳しい状況にあります。今年に入ってからも、有名な英字新聞プノンペン・ポスト紙が、フン・セン首相と関係のある会社を経営するマレーシアのビジネスマンに売却されました。また、売却される前に同紙に対して390万米ドル（約4億3000万円）の課税を不当に課されていました。

［参考①］…「アジア経済新聞 第20号（2018年7月9日）」に本記事に関する内容の長谷部のインタビュー記事が掲載。
http://o-ira.com/projects ［参考②］…カンボジアの政治状況に関しては、本誌329号の高橋智史寄稿の記事も参照。

継続された日本のＯＤＡ

このような状況を踏まえて、米国政府と欧州連合（ＥＵ）は、早い段階から今年7月の総選挙への支援を凍結していました。そもそも選挙が公正で自由なものではないからです。一方で日本政府は、カンボジア政府に公正な選挙の働きかけを行ったことも確かにありますが選挙協力の続行を表明し、最終的にＯＤＡ（無償資金）によって投票箱など8億円相当の支援をしました（注1）。

7月31日に外務省で開催されたＯＤＡ政策協議会において、ヒューマン・ライツ・ウォッチ、ヒューマンライツ・ナウ2団体が「現在の政治状況下における日本の対カンボジア外交とＯＤＡ事業について」という議題提案を行い、「今回の選挙を日本政府はどのように評価するのか」「このような現状は、カンボジアにおける日本のＯＤＡ事業の継続に求められる要件を満たしているのか」という疑問を投げかけられました。

この会議にはＪＶＣからも渡辺と長谷部が参加しており、現場でみてきた経緯も踏まえて、以下の点を外務省に対して問いかけました。①すでに現地のＮＧＯや住民組織が、住民に不利益の多い開発に対してなかなか声を出せない状況になりつつあること、②そうした団体の中には業務停止に追い込まれたり、場合によっては住民の方が殺されるといった事態も発生していること、③現在のカンボジアの政治社会状況において日本の対カンボジアＯＤＡは継続されていい状況であるのか、その悪影響についても（選挙結果が出る前から）考えていくべき事項ではないか、④（選挙支援は行った一方で）日本政府が停戦監視団を派遣しなかった理由はなにか、などです。

しかし、外務省からは今回の選挙結果の評価も含め、ＮＧＯ側からの質問に対してはゼロ回答でした。

現在のカンボジア政府の動向の背景には、今や日本に代わって対カンボジア最大の支援国となっている中国の後ろ盾があります。例えば、中国マネーの流入が激しいシアヌークビルは港湾都市として大きく変貌を遂げており、その経済特区のほとんどが中国企業で、さまざまな税免除の恩恵を受けています。カンボジア政府の論理を単純化してみると、「これまでの大きな支援国、米国やＥＵ諸国は人権や民主主義を掲げて選挙が正当なものと言えないというが、今の我々には中国がいるし、中国との経済関係が強固であるから、なにを言われても我々のやり方を通す」といったところでしょうか。

マクロな数字に隠されてしまうことに目を向け続ける

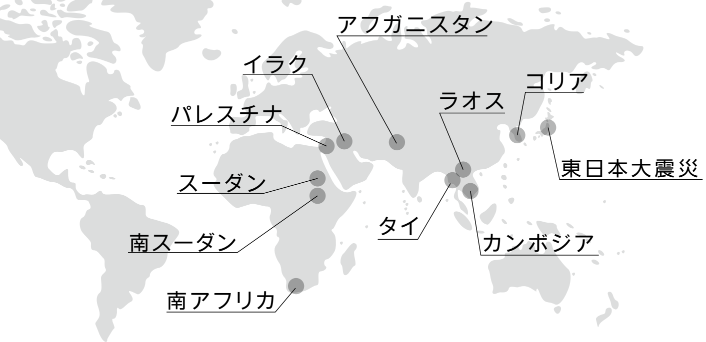
近年のカンボジアは高い経済成長率を維持しており、世界銀行のデータを見ると、貧困率が07年の47・8％から14年の13・5％と大幅に減少していたり、ＷＨＯによると平均余命も90年の54歳から12年には72歳となっているなど、向上している側面もたしかにあります（注2）。

ただ、世界銀行の分析によると貧困ライン以下の方たちと、そのラインの上にはあっても、なにかあったらすぐにラインの下に転落してしまう可能性の人たちを合わせると、これらの層は人口の4割近くにもなります（注3）。高度な医療を受けるには高額な民間の医療機関にかからなければならず、近年になって頻発している天候不順によって作物が十分取れない年もあり、その生活は常に危険にさらされています。

昨年、ＪＶＣの活動の一環で村の長老への聞き取りに参加しました。そこでは、村人の出稼ぎの割合がこの数年で4割から5割になっている村もありました。また、十代後半から二十代の若者のほとんどが出稼ぎに出ているという村もありました。その出稼ぎ先は、プノンペンやシェムリアップなど国内だけでなく、半数以上はタイであって、建設現場やプランテーションに従事しているそうです。

このような側面は、カンボジアの農村部でいまもよく見られます。我々の役割は、カンボジア社会の中で人々の暮らし、社会が持続的であるために活動していくこと、そして声を出せないカンボジアの人々を代弁することであると考えています。

◎注1…外務省サイトより。 https://ngo-jvc.info/2QKUTmb
◎注2…WHOサイトより。 https://ngo-jvc.info/2yAfGRQ
◎注3…世界銀行サイトより。 https://ngo-jvc.info/2P0lONo



JVCは現在、11の国・地域で活動しています。

プロジェクト一覧

6月後半 〜9月前半

アフガニスタン

平和活動／
識字教育（ナンガルハル県）

女子教育は厳しい状況が続いているが、
女性の先生がいて教室が自身の村の中であれば参加しやすい

アフガニスタンでは特に都市部から離れた村々で成人識字率が非常に低く、現教育制度では中退・退学後15歳以上になると正規の公立学校に戻ることができない。そこで今年度から、JVCは「識字アクション」を通して15歳以上の男女のための識字教室と、就学年齢の子どもたちが学校に通い続けるための普通教育促進に取り組んでいる。識字教室では9ヵ月かけて公用語であるパシュトゥ語の読み書きと算数を学び、公立小学校の3年生レベルを目指す。教育省との覚書締結を経て、村人から選ばれた先生たちが7月に指導研修を終え、5村で約300人を対象として識字教室がスタートした。

16年度に始まった「ピースアクション」では、これまでJVCが活動してきた地域で平和や非暴力の学び合いを重ねている。春に開催したジャララバード市内でのワークショップに治安の悪い他地域の住民が初めて参加しており、その参加者が治安が良好な地域を8月に実際に訪問し、平和な地域づくりへの意見交換を行った。（加藤）

調査研究

外務省・JICAとの政策協議／
各種提言

◎NGO・外務省定期協議会2018年度第1回ODA政策協議会（7月31日）：長谷部・渡辺が参加。ODAの枠組みでの軍への協力について他団体とともに問題提起した。
◎事務局長の長谷部を中心として、7月末開催のカンボジア総選挙及び対カンボジアODAに関して、政府関係者との意見交換を6月以降に継続的に行った。
◎モザンビーク／プロサバンナ事業関連：
・河野太郎外務大臣・JICA理事長に対する要請文を提出（6月22日）。
・外務大臣の代理として国際協力局長と面会（7月23日）。
・上記の ODA政策協議会にて関連議題を提出（7月31日）。
・JBICが融資するナカラ回廊沿い鉄道整備事業による住民への被害状況について、JBICとNGO間で協議（8月9日）。
・モザンビークとブラジルから農民・市民社会メンバーを招へいしての国際シンポジウム（11月開催）が決定。6月26日に実行委員会を設立、準備を進めている。

（渡辺）

南スーダン

国内避難民
キャンプでの支援

夏休み教室で絵を描く子ども

2016年から続く内戦について、8月28日、敵対するキール大統領派とマシャール前副大統領派、その他多数の反政府勢力が和平合意に署名した。戦闘の停止、暫定統一政府の発足、3年後の総選挙実施などが合意された。しかしこれに異を唱える勢力もあり、今後の展開は予断を許さない。

スーダン国境沿いのイーダ難民キャンプでは、7月から幼稚園、小学校が長期休暇に入った。この期間を利用して、幼稚園のボランティア教員45人への2ヵ月間の研修が7月16日にスタート。難民自身による幼稚園運営を支援するため2013年から実施してきたもので、英語、算数などボランティア自身の基礎学力向上のほか、音楽、図工といった情操教育の指導法、子どもの心理ケアなどを学ぶ。

難民キャンプでは、紛争によって保護者と死別・離別し商業地区で生活を送る「ストリートチルドレン」の小学校復学支援も実施している。長期休暇中はJVCが週4日子どもたちを集め、スポーツ活動や家庭菜園なども取り入れた夏休み教室を行っている。（今井）

コリア

絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』／大学生平和交流プログラム

「くまもと展」で開催されたギャラリートークには35名が参加、終了後には交流会も行われた

今年トライアル実施している大学生平和交流プログラムの一環として、6月に第2回、7月に第3回セミナーを開催した。本プログラムに参加している学生の中から6名が8月に訪朝し、平壌外国語大学の学生と交流した（本誌P10を参照）。

絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』では、6月に大阪市生野区と山梨英和中学校（甲府市）、8月には熊本市で展示会を開催するなど、国内展示の機会が増えている。特に、熊本では初めての絵画展となり、新代表の今井が現地を訪問、ギャラリートークを開催し、高評価を得た。9月には韓国での平和キャンプに大阪の子どもが参加する予定だったが、台風被害による関空機能停止の影響で参加を見送り、事務局のみ訪韓し、絵画展とワークショップを実施した。

8月の平壌訪問から帰国後、多くのメディアやイベントに今井や宮西、訪朝学生が出演し、これまでにない発信の機会を得ている。（宮西）

南アフリカ

新事業に向けての調査

8月には南アフリカ事業担当の渡辺も出張してパートナー候補の団体とのワークショップに参加した

2018年度上半期は、10月から新しい事業を開始するための調査・情報収集を実施している。2017年度までの経験と成果を周辺地域に広げていくために、ソーシャルワーカーや周辺NGOネットワークからの情報に基づいて近隣の子どもケアセンターや青少年らと活動を行う住民組織を訪問。6月以降は、親のいない子どもなどのケアをコミュニティベースで行う2団体を候補として訪問してきた。通う子どもの特徴や活動の実態、地域について知るための調査のみならず、候補団体に今後協働した際のイメージをもってもらうため、JVC南アフリカが行ってきた活動を紹介するため、2017年度までの活動パートナーである子どもケアセンターのボランティアと青少年らとの交流も行った。両団体ともにJVCとの協働に関心を持つようになり、9月以降、具体的な活動イメージなどについて話し合っている。

（渡辺）

スーダン

紛争による避難民・難民への支援（南コルドファン州）

バルノ小学校校舎引き渡し式にて。これまで屋外や屋根だけの小屋で授業を受けていた子どもたちの学び舎となる

◎出生登録支援：カドグリでの出生登録支援（第3期）は、支援対象となる約500名の児童の手続きを進めている。今年度はすべての児童について裁判所での手続きが必要なケース（父親または両親ともに不在）であり、判事による母親へのインタビュー等が完了し、証明書が発行された。現在、内務省での登録手続きを進めている。また、新たにリストアップされた30名の子どもについても手続きを進めていく。宗教関係者を招いて婚外子の問題について話し合うグループミーティングについては、予定していた10ヵ所での実施を終え、さらに数ヵ所で行う予定。

◎小学校校舎増設：カドグリからの帰還の動きがみられるリフ・アシャギ郡バルノおよびバルダッブにおいて、それぞれ3教室棟1棟が完成し8月に引き渡しを行った。教室用机いすの支援もあわせて行ったが、既存の机といすの劣化が激しく、使用できない状態のものも多いため、それらの修理を行う予定。7月末にはカドグリのヘル・ジャディーダ地区での4教室（2教室棟×2棟）の建設も開始し、9月末の完工を見込んでいる。

（山本）

ラオス

農業・農村開発／土地森林保全事業（サワナケート県）

衛星写真を使って村境や森林の範囲を村人に確認するJVCスタッフ（写真両端）

6月下旬、JVCの活動地であるピン郡とアサパントン郡の両郡行政との会議を開催し、4月に開始した新規プロジェクトの内容説明や4半期ごとの計画、報告に関する協議を行った。その後、対象村10村での調査活動を開始した。調査活動では、人口や世帯数といった一般情報をはじめとして、自然資源の利用状況などのデータを集めるとともに、衛星写真を使って村境や森林のおおよその範囲を確認する作業を進めた。今後は収集したデータの整理、分析を行った上で、これらのデータに基づいた農業技術研修や自然資源管理の活動に取り組んでいく予定である。

8月には村の地図作成に必要となるGISの専門家を招聘し、技術向上のための内部研修を実施した。一方、自然資源に関する法的権利を広く伝える法律カレンダーについて、関係団体で構成されるタスクチームの会議に担当スタッフが継続的に参加し、2019年版カレンダーの内容策定を進めている。

8月下旬、現地駐在員の山室が一時帰国し、支援者に対する事業進捗報告や一般向け報告会を行った。

（岩田）

パレスチナ

サマーキャンプでジェンダーに関するワークショップを実施。異なる意見の若者から意見を引き出すMRS職員

若者のレジリエンス向上事業／栄養失調予防事業

◎若者のレジリエンス・地域保健の向上事業（東エルサレム）：パートナー団体MRSとモニタリング方法を見直す意見交換の場を設け、事業の質の向上を図った。また8月前半、MRSが例年通り子ども向けサマーキャンプ（夏季休暇中の課外活動）を3地域で運営した。保守的な村の青年も交え、例年より多い245人が参加し、女性の地位について考える機会や、人々の連帯を深める活動、迫害者が被迫害者の権利をどのように奪うかを知るための裁判ゲームなど、レジリエンス向上に必要な要素を取り入れ行った。またJVCは地元のコミュニティセンターと日本文化紹介イベントを開催。事業校生徒を含む200人ほどがワークショップやステージ発表を通して異文化を体験し、新たな世界へ視野を広げた。
◎栄養失調予防事業（ガザ地区）：昨年度に続いてUNICEFとの協働が再度決定し、前年度と同じ経験豊富なコアスタッフと活動を再開することが決まった。病院への緊急支援実施に伴い、帰還を求める大規模デモに関するモニタリングも継続。支援で購入予定の人工呼吸器は、入札を経て9月中に業者決定・調達される予定。（山村）

カンボジア

9月・農家の家庭菜園の水やりを体験する新潟大学の学生。右はフィールドスタッフのソマッチ

農村における生業改善支援／環境教育

地域開発グループマネージャーの渡辺、カンボジア事業担当の下田とともに、6月末に現行事業（2015年10月～2019年3月）の評価会議を事業地において実施した。7月は会議のフォローアップなどを行い、これらの評価結果をもとに、18度内に次期事業計画の立案を予定している。8月は次期活動対象候補村での生活調査を行った。9月には神戸大学、新潟大学の学生たちの受入れを行い、新潟大学については「農村開発の現場や村の生活に触れる」目的ということで、農家訪問や村人へのインタビューなどを実施した。

プノンペン事務所の引っ越しを7月末で完了。事務所内に設置していた資料・情報センター（TRC）は、王立農業大学の図書館への移管が決定した。同大学は学生数7,000人、図書館利用者数は少ない日でも約100人／日と、TRCと比べ（2017年度利用者数61名）多くの学生に貴重な書籍を活用してもらうことができる。9月末までに全書籍を移管予定。

カンボジアでは7月29日に総選挙が実施された。与党が全議席を占めるなど、独裁化を懸念する声が国内外から聞かれている。（大村）

南相馬

災害公営住宅でのサロン運営

2018年4月から南相馬市内において、福島第一原発事故からの避難者が暮らす北原団地において自治会を結成すべく、団地内で開催されるサロン活動に定期的に参加し団地住民との関係性構築を図ると共に、カウンターパートである地元NPOと活動のゴールを共有し協働体制を作り上げることを目指して話し合いを重ねてきた。しかし、地元NPO側の体制変更などの要因により約半年が経過しても協働体制を築けておらず、今年度中の自治会結成が困難な状況となりつつある。引き続き、地元NPOとの協働体制構築に努めて行くが、一方で、年次計画変更の可能性も探るべく、団地住民や地元の社会福祉協議会などへのヒアリングを進めている。

（横山）

イラク

「平和のひろば」を開催

7月1日から、「平和のひろば」が6週間にわたってキルクークで開催された。7～14歳の子どもたち72人が参加した。うち半数が国内避難民の子どもたちで、半数が地元の子どもたちだった。プログラムとしては「平和・共生」をテーマとしたワークショップを実施。避難民の子どもたちは、学校に通う機会を奪われている子も多く、その子たちにとっては特に貴重な場となった。精神的なダメージを受けている子も多く、そのケアにも重点を置いた。また、子どもたちは互いに協力して「最高の居場所」という作品を作った。

キルクークとJVC東京事務所をスカイプでつなぎ、イラクの子どもたちとJVCスタッフがビデオチャットをする機会も設けた。（ガムラ）

タイ

日・タイ経験交流

タイにおいて生産者と消費者が対等な関係の下に成り立つ食のシステムを構築するべく、これまで過去2年に渡って、タイから農民やNGOスタッフを日本に招へいし、日本の有機農業運動や生活協同組合の取組みを視察してきた。今秋の交流プログラム企画についても、訪問先の生活クラブ生協、東金市の若手農家グループ、小川町での有機農家グループとプログラム内容の詳細を詰めている最中。9月上旬には補助金採択が決定し、7名のタイのNGO関係者を招聘すること、日程は10月下旬～11月上旬の2週間とすることを決めた。

（下田）

「不都合な真実」から目をそらし続けられるのか

ＪＶＣ専門アドバイザー（政策提言）　高橋　清貴

この連載で取り上げているＪＩＣＡによるプロサバンナ事業は、現在その事業計画（マスタープラン）の策定を中断している。これまで現地や日本の市民団体が提言活動を続けてきた結果と言えるかもしれないが、かと言って事業の影響を受ける現地農民を取り巻く状況は、必ずしも好転はしていない。市民的自由や人権の保障といった（ある程度普遍的と言える）価値を、開発支援の現場においてどのような姿勢で組み込んでいくべきなのだろうか。

「民主主義」の後退と市民的自由の抑圧

フリーダム・ハウスという米国に本部を置くＮＧＯが出している報告書、『Freedom in the World 2018』（注1）を読む機会があった。世界の自由権、市民権の状況を調べて毎年1月に発行している世界人権状況白書の一つである。レポートは、国民に自由が保証されており、公正な選挙、少数派の権利の保障、報道の自由、適切な法制度がある国家を「自由のある国家」とし、このような国家は世界の全国家のうち45％で、「部分的に自由」なのは30％、「自由でない」国は25％で、人口別に見ると、「自由」が39％、「部分的に自由」が24％、「自由でない」が37％としている。いわゆる「西側諸国」の大半が「自由」な国家とされ、アフリカや中東に「自由でない」国が多い。特に、今年のレポートの目玉は、トランプが米国の大統領となったことで米国の民主主義に対する影響力が弱まる一方で、中国やロシアが「非民主主義」への影響力を強め、世界全体で民主主義が脅かされる動きを加速していると警鐘をならしている点である。確かに、フリーダム・ハウスの考える「民主主義」には米国的な民主主義思想が色濃く反映されていて必ずしも全面的に賛同できるものではないが、世界で「民主主義」や市民的自由が危うくなってきているという指摘は、プロサバンナにおいても実感しているだけに違和感なく読んだ。

これまで何度もＪＶＣの渡辺が報告してきたように、プロサバンナ事業をどうしても進めたいモザンビーク政府の、農民に対する厳しい姿勢はナンプーラ州農務局長の抑圧的とも取れる発言を導き出したりしている。抵抗する農民たちは、局長の発言を表現の自由を奪う人権侵害であると指摘している。日本では想像しづらいが、役人の前で農民は自由な発言を躊躇する。それでも彼らは果敢にプロサバンナ事業に対する異議を唱え、抵抗を続ける。そのコミットメントに敬服すると同時に、彼らが危険と隣合わせの状況に置かれていることを憂えないわけにはいかない。仮にマスタープランについて話し合いができるようになったとしても、政府による抑圧状況が続く限り、自由な対話は見込めないからだ。モザンビーク農民のための開発であるならば、人権抑圧状況の改善は、事業を進める大前提であるはずだ。そして、それは援助する側の責任でもある。にも関わらず、外務省は一貫して人権問題に向き合おうとしない。

「立場をとる」ことの責任を

一体、どういうことなのだろうか？証拠に乏しいと言われる心配もあって、市民たちは農務局長の発言の録音も資料として提供した。それでも、外務省は人権侵害を認めない。提供した録音に信憑性がないということなのだろうか？問い質しても、外務省は「その立場にない」という煮え切らない発言と態度を繰り返すばかりだ（注2）。

確かに、日本がモザンビーク政府の人権侵害を認めれば、その影響は小さくないだろう。どこまでが人権侵害でどこからそうでないかという線引きは慎重を要する、という言い分もわからないわけではない。しかし、重要なのは、マスタープランづくりが進む限り、危険な人権侵害状況が続いていくことは確実であるし、その被害を被るのは農民に他ならないことだ。プロサバンナ事業とは、建前でも日本政府は「農民のため」であると言っていたはずだ。人権問題に後ろ向きの姿勢を続けることは、「農民のための開発」に正面から向き合わないことと同義ではないのか。こうしたところから、農民たちは「プロサバンナは農民のため」と言っても口先だけに過ぎないと看破するのだ。

「地球の境界」（注3）を超えようとしている今、プロサバンナに限らず、経済成長重視の開発は、食、水、エネルギーの不足や環境破壊、民主主義の後退といった「壁」に直面することは必至だ。そして、それらは政府自身に向けて「不都合な真実」となって立ち現れてくるであろう。その時、日本はどうするのだろうか？主体的に責任と判断力を持って行動するだろうか。それとも、「相手国にせい」にして曖昧な姿勢を取り続けるのだろうか？それは、大きなツケとなって日本自身に降りかかってくるのではないだろうか。日本がＳＤＧｓを標榜するのであれば、"Not Business As Usual"、すなわち既存のシステムの改善ではなく、ラジカルに新しい経済と社会のシステムを求める方向にしっかりと舵を切るべきである。プロサバンナの人権問題にきちんと向き合えない政府に、ＳＤＧｓを達成させる力はない。

◎注1…https://freedomhouse.org/report/freedom-world/freedom-world-2018
◎注2…こうした経緯については、本誌332号の本連載記事を参照。
◎注3…https://www.stockholmresilience.org

映画祭告知

第12回国際有機農業映画祭２０１８

次の世代に「えらい」ことを引き継がないために

国際有機農業映画祭運営委員　大野 和興

ＪＶＣに第1回以来協賛いただいてきた「国際有機農業映画祭」は、今年で12回を迎えました。11月18日（日）に法政大市谷キャンパスで開催します。

今年のテーマは「世の中、えらいことになるでぇ」。貧困の拡大、環境破壊、野と食の危機が進む世界を凝視しながら、この先の希望を有機農業に託そうという思いを込めました。

上映作品は以下の5本です。いま最大の環境汚染といわれているプラスティック問題を追った『海—消えたプラスチックの謎』、農薬がいかに生命体を危機に追い込んでいるかを描いた『狂った蜂２』（日本で初公開）、遺伝子組み換えに疑問を持つカナダ人女性の取材の旅を追う『たねと私の旅』（日本初公開）、トマトを通して農業のグローバル化の現実を追った『トマト帝国』（日本初公開）、そして日本の有機農業運動の草分け、東京・世田谷の大平農園の今を描く『大平農園４０１年目の四季』です。また、若手有機農業者3人によるトーク「これからを話そう」もあります。

第12回国際有機農業映画祭 2018

日時：2018年11月18日（日）10:00～20:00
場所：法政大学市谷キャンパス・富士見ゲート棟 G201教室
チケット：[一般] 前売2,000円／当日2,500円
[学生・25歳以下] 前売り500円／当日1,000円
※中学生以下無料
上映作品：記事参照

公式サイト　http://www.yuki-eiga.com/

報告

「第9回沖縄平和賞」受賞

事務局次長　細野 純也

この度、ＪＶＣは沖縄県から「第9回沖縄平和賞」を受賞しました。この賞は、「沖縄の視点から新たな国際平和の創造を目指し、沖縄と地理的・歴史的に関わりの深いアジア太平洋地域の平和の構築・維持に貢献した個人・団体を顕彰」するものです(沖縄県ウェブサイトより抜粋)。授賞式は10月23日に開催予定です。

今回は、ＪＶＣの40年近くにわたる活動歴と、幅広い分野・地域での活動実績、および地域に根ざし現地の人々に寄り添う姿勢が「人間の安全保障の実現」に寄与してきたこと、また平和構築活動の発展可能性などへの評価が、受賞へと結びついたとのことです。

以下、受賞が発表されました8月27日にＪＶＣウェブサイトに掲載しました文面を再掲します。

◎

今回の受賞に対して、心より感謝申し上げます。平和を強く希求する沖縄の皆さまから、このように私たちＪＶＣの活動を評価していただけたこと、とても光栄に、嬉しく思います。

我々と共に活動する現地の人々、1980年の創設以来、これまでＪＶＣに関わってきたすべてのボランティア、スタッフの努力の結晶が実を結んだと感じております。今回名誉ある賞をいただけましたのも、これまでＪＶＣを支えてくださった皆さまのおかげです。

平和は、政治家など力のある一部の人のみにつくられるものではなく、市井の人々が自らの手でつくっていくものであると信じてＪＶＣは活動しております。

この度の受賞を励みとしてより一層活動に邁進し、資源収奪や紛争など困難な状況にありながらも自分たちの力を信じて前に進んでいる人々と共に、平和な社会の実現を目指します。

◎

これまでＪＶＣは、沖縄と直接的な関係はそれほどありませんでした。ただ、例えば沖縄が抱える基地問題にはパレスチナの占領問題との類似性が、また東アジアの安全保障環境という意味ではコリア事業とも重なる部分もあるかと思います。今回の受賞を機に、今後ＪＶＣが沖縄に対してどのように関われるか議論していきます。

イベントあらかると 7月～9月

いべんと・ピックアップ!

9/5（水）東京・JVC東京事務所

ラオスの農村を支える ～村の暮らし、自然、法律、政策を踏まえて～

JVCラオスボランティアチーム　福島 延好

地図を使って活動村を紹介する山室

9月５日の夜、JVC東京事務所において、一時帰国中のラオス現地駐在員である山室良平による「帰国報告会」が開催された。

自己紹介から始まって、最初にラオスという国の概要の解説があった。ラオスは森林の割合が国土の約７割というのに違和感はなかったが、日本の森林率もほぼ同じということには逆に驚かされた。原生林と人工林の違いがあるとはいえ、日本もまんざらではない。

続いてラオスの農村の暮らしの説明。基本的に自給自足だが、耕作や家畜のほか、森からはキノコやタケノコ、魚、薬草などの自然の恵みを採集して生活の足しにしている。それらが余れば、売って現金収入を得る。耕地の少ない世帯や働き手のない寡婦などにとって、これら自然の恵みはなくてはならないものである。

そんなラオスも、今やGDP成長率が連続して7%を超え、ASEANで一番の経済成長をみせている。しかしこの成長率も電力や原材料の輸出が中心で、そのためのダム建設や鉱山開発、プランテーションなどが農村地域で盛んに行われており、結果的に住民が補償もなく農地や森を失ったり、河川の水質が汚染されたり、農民の生活が破壊される事例も少なくない。ラオスでも大規模開発の前に環境影響調査を行うように定めた法律があるが、それを知らない人がほとんどなのだとか。

JVCでは、このように開発から取り残される人が出ることを防ぎ、その暮らしを支える森を守るための活動を行っている。そのひとつの例として「村のデータをまとめる活動」がある。村の地図を作り、村人が使ってきた森や守るべき森の範囲を記し、そこで獲れる林産物を調べて記録する。それらが村人の「財産」であって、外部からの圧力でこれらが侵害されないように、権利意識をもって守れるようにするために研修も行う。

現在JVCが活動しているのは、ラオス中南部サワンナケート県の２郡10村である。たった10村で何が変わるのか…という向きもあろうが、これら10村での活動をモデルケースとして冊子にまとめ、機会があれば政策提言にもつなげていくことが目標とのことであった。

報告後の質疑応答では、山室個人のラオス語習得の苦労話や日常の心得の変化、行政との連携義務を逆手に取って経験を発信する目論見、ラオス国立大学との自然環境調査に関する協働などについて紹介があった。

その他の主なイベント

7/3（火）東京都港区
パレスチナ・ガザの今 ～現地からの最新報告と人権をめぐる専門解説～
5月に実施された米国大使館のエルサレム移転に伴う影響を、現地を取材したジャーナリストや他NGOの方とともに報告しました。

7/7（土）東京都目黒区【出展】
国境なきカレ～団

7/7（土）東京都新宿区【外部講演】
平和をどうつくる? ～パレスチナの状況から考える～

7/8（日）神奈川県川崎市【出展】
2018インターナショナル・フェスティバルinカワサキ

7/9（月）東京都渋谷区【外部講演】
映画『ガザの美容室』公開記念トークイベント

7/22（日）JVC東京事務所
どうなっているの？日本の農業とタネの話 ～農家の視点から考える～
4月に主要農作物種子法が廃止されたことを受け、農業の根幹を支えるタネについての現状を外部講師も交えて共有しました。

7/27（金）～29（日）新潟県湯沢町【出展】
フジロックフェスティバル2018

8/16（木）～9/8（土）熊本県熊本市
南北コリアと日本のともだち展 inくまもと

8/19（日）東京都新宿区【外部講演】
イスラエル・パレスチナの葛藤と対話 ～70年目を迎えて～

8/20（月）東京都新宿区【外部講演】
アフガニスタンの事例を通じて、マラリアを知る＆考える

8/31（金）福岡県福岡市【外部講演】
現場にこだわり 時代を読む ～ JVC新代表トークイベント@福岡～

9/5（水）JVC東京事務所
ラオスの農村を支える ～村の暮らし、自然、法律、政策を踏まえて～
一時帰国した駐在員の山室が、ラオスの概況や農村の生活、政府の経済政策による村人への影響などをJVCの活動と交えて報告しました。

9/8（土）東京都渋谷区
ピョンヤン訪問報告会 「知る」ことから始める平和交流
8月に実施した訪朝に同行したジャーナリストも交えて、現地の様子や普通の人びとの姿をお伝えしました。

9/8（土）JVC東京事務所
イラクカフェ
アラブのお茶やスイーツを楽しみながら現代イラクについて話し合うイベントです。

9/8（土）　東京都新宿区【外部講演】
ブロックで救え！ガザでのイノベーションの起こし方 ～ある女性企業家の挑戦～

9/14（金）東京都渋谷区【外部講演】
伝える人になろう講座 ～ノースコリアを知る

9/22（土）東京都渋谷区
日本人医師・NGOによるパレスチナ緊急医療支援報告「世界最大の野外監獄」ガザの病院で銃撃負傷者と向き合って
7月にパレスチナ・ガザ地区で医療支援をしてきた医師をお招きして、現地の情勢とともに人々の様子を報告しました。

9/22（土）東京都豊島区
千一夜物語の舞台としてのバグダッド
『千一夜物語』の原型の舞台であるバグダッド。イラクの歴史とその文化について、物語を通じてその魅力をお伝えしました。

9/29（土）東京都江東区【出展】
グローバルフェスタJAPAN2018

JVCなひと

写真と病と歌と踊りと

JVCボランティア　中井 幹雄

JVCに関わったきっかけはもう20年くらい前でしょうか、新聞記事でJVCの活動を知り、それまで海外に行った経験は数度だけでしたから、「国際協力として海外で活動する」人たちに対する興味がわき、事務所を訪れました。当時、JVCがベトナムでプロジェクトを実施していたことから、具体的に関わりながら何かを学び取れば人生の足しになるだろうと思い、ベトナムボランティアチームに加わりました。また、私は他の人よりはきちんと写真を撮ることができる技術を持っていましたから、JVCのイベントで写真を撮ったりしてきました。その後、ベトナムでのプロジェクトが終了したためベトナムチームも消滅しましたが、その頃のメンバーとは現在もまだおつきあいがあります。JVCに関わり色々と学んだことが、世界や地球のことを考える上で私の大きな支点となっていることは確かなことです。

これ以降は蛇足ですが、この度、私が脳梗塞で入院して以降、JVCの皆様に色々助けていただいたことには本当に感謝しています。病を得たことは不幸と言えますが、それ以上にJVCの方たちをはじめ多くの皆様の暖かい支えがあるおかげで、辛い入院生活もなんとか耐えることができましたことはありがたくもあり、得難い経験をさせてもらっていると考えています。

入院中のある夜のこと、「上を向いて歩こう」の歌声が聞こえてきたので行ってみると、車椅子の入院患者の女性たちが歌っていました。歌が炭坑節に変わったので、（早い盆踊りだな）と思いつつ彼女たちの周りを踊ってみたところ、彼女たちも手を振って楽しんでくれました。その翌週、「明日退院する人のためにみんなで歌うから、また踊ってください」と言われたので、翌日は炭坑節を踊るだけでなくパソコンを持って来て「東京音頭」を流して踊ると、皆さん手だけの振りですが昔を思い出して楽しく踊っていました。

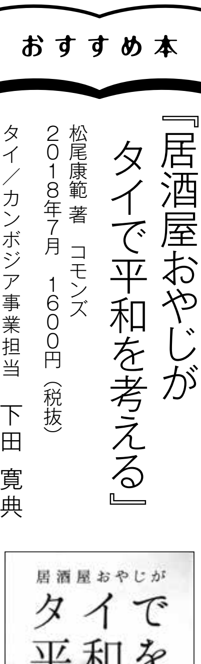
今度JVCのスタディツアーがあるとして、現地で住民の方たちが伝統的な踊りを踊ってくれたら、次はこちらが東京音頭や炭坑節を踊ってみたら交流が膨らむのではないでしょうか。簡単ですから誰でも踊れるし、失敗しても楽しめれば良いのですから。

おすすめ本

『居酒屋おやじがタイで平和を考える』

松尾康範 著　コモンズ
2018年7月　1600円（税抜）

タイ／カンボジア事業担当　下田 寛典



JVCのOB／OGたちには、そのまま国際協力の仕事に就く人、農業の道に進む人、地元／地域活性化を志す人など様々いますが、居酒屋店主と言ったら元JVCタイの松尾康範さんでしょう。東北タイでの活動記『イサーンの百姓たち』（めこん、04年発行）に続く新著『居酒屋おやじがタイで平和を考える』がコモンズから7月に出版されました。

今は神奈川県横須賀市にある居酒屋「百年の杜」を経営する松尾さんは、JVCタイが実施した東北タイ・コンケン県の「地場の朝市」プロジェクトに携わっていました。当時からアジア農民交流センター（AFEC）の活動も並行して続けており、「人と人との交流なき国際協力はあり得ない」という松尾さんの言葉は、JVCタイに携わってきた人たちの人生訓にもなっています。

本書は、AFECが17年に実施したタイでの交流の旅をなぞるように、かつて松尾さんがNGO活動してきた軌跡と食卓の向こう側にある農村が、タイの農民の視点から綴られています。タイトルから想起される「国際協力と居酒屋？どう関係があるの？」という疑問も、ロードムービーのような本書を読み進めていけば「なるほど」と納得。軽妙なタッチの文章からは、JVCが長期目標に掲げる「安心して共に生きられる社会」というのは誰か他人がつくって提供してくれるものではなく、私たちひとり一人の手にかかっているということが伝わってきます。そして本を読み終えた頃には、ひとつの旅を終えた感じがして、なんとも心地よい気持ちになります。

JVCの活動を伝えるとき、地域開発と人道支援、そしてアドボカシーと三本柱で説明することが多いですが、それぞれが独立してあるのではなく、困難な状況にある隣人に対して今できることを精一杯やる協力活動があり、隣人を傷つけまいとする平和のための活動があり、隣人に影響を及ぼす政策や開発事業に声をあげるアドボカシーがあるのです。人々のささやかな日常が脅かされる今の時代だからこそ、本書が示す地に足の着いた「生き方」からの国際協力というものがひとつの拠り所になるのではないでしょうか。

お知らせ

投稿募集中

JVCや会報誌に関するご意見・ご希望をお寄せください。また、「JVCなひと」への自薦寄稿も大歓迎！ JVCの会員になったきっかけや最近の関心事、ほかの会員の皆様へ伝えたいことなど、800字以内でお送りください。そして、「いまさら聞けないQ&A」でも質問を募集中です。会員になって長いけどそういえば聞いてみたいことがあった、まだ会員になったばかりだから教えてほしいことがある等々、なんでも結構です。皆様からの投稿をお待ちしております！

【投稿先】会員担当　宮西まで
E-mail：miyanishi@ngo-jvc.net
FAX：03-3835-0519

「夏の募金」報告 ※指定寄付／無指定寄付すべてを含みます

2018年「夏の募金」へご協力いただき、ありがとうございました！

6月14日～8月31日集計

810件　7,167,942円

募金集計

募金にご協力ありがとうございます。
JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。
JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指定先	期間（6～8月）
無指定	12,996,883
タイ	35,000
カンボジア	347,864
ラオス	551,400
南アフリカ	59,500
アフガニスタン	609,562
イラク	429,500
スーダン	548,500
南スーダン	264,134
パレスチナ	1,477,484
コリア	701,751
東日本大震災	669,189
みどり一本	154,946
東京管理	23,669
調査研究	16,500
コンサート	432,460
合　計	19,318,342円

※上表に「季節の募金（夏/冬/春）」も含みます。

JVC国際協力コンサート 2018 当日ボランティア募集

本誌特集でもご案内したとおり、フィナーレとなる国際協力コンサート。東京公演ではヘンデルの『メサイア』、大阪公演ではバッハの『クリスマス・オラトリオ』を演奏します。
最後のコンサートを裏方として支えてください！ ご参加をお待ちしております。

◎日程
[東京] 12月1日（土）10時～19時ごろ撤収完了
[大阪] 12月8日（土）10時～18時ごろ撤収完了

◎集合場所
[東京] 昭和女子大学人見記念講堂 ロビー
（三軒茶屋駅が最寄です）
[大阪] いずみホール ロビー（楽屋口からお入りください）

◎内容
プログラム渡し、場内案内、プレゼント受付、物品販売サポートなど（東京と大阪で異なります）

◎服装
スーツなど、セミフォーマルな服装

申込締切：11月16日（金）※東京・大阪共通
申込先：コンサート事務局まで
[TEL]03-3836-4108 [メール]concert@ngo-jvc.net

人　事

入　職

今中　航
スーダン事務所現地駐在員（10月1日付）
京都出身。大学在学中のイエメン留学で、民主革命や紛争の影響等でライフラインが崩壊した生活、教育を受けられない子どもたち／仕事を失う大人たちを目の当たりに。卒業後、電力メーカー勤務を経て、より現地の人々に寄り添いながら問題解決の道を探したいと思い、JVCへ。趣味はランニング、旅行。

編集後記

今年の夏の2週間、マレーシア・ボルネオ島サラワク州の熱帯林で過ごした。1989年以降、約30回目の滞在だ。熱帯林伐採、大規模プランテーション、ダム。森の先住民の環境は悪化するばかりだ。1990年前後、報道の影響もあり全国で「熱帯林を守れ！」との市民運動が起き、JVCも有志が現地ツアーや豪華客船でチャリティダンス「Dance for Sarawak」を行った。今は昔だ。今、サラワクに通い続けるのは私一人だけ。必死に森を守ろうとする先住民とは最後まで付き合う。（樫）

Trial&Error　トライアル・アンド・エラー　（試行錯誤）

2018年10月20日発行（通巻333号・年4回発行）　定価　500円（税込）

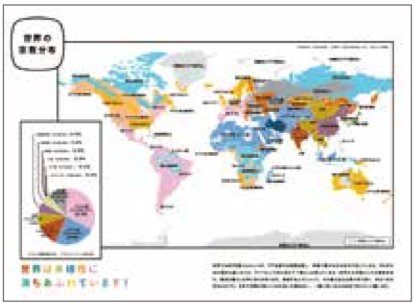
TRIAL& ERROR

詳細は
同封のチラシを
ご覧ください。

壁掛けカレンダー

2019年のテーマは“多様性”です。「宗教分布地図」「主要宗教案内」付き

「主要宗教案内」は壁掛けカレンダーのみです。



特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員数（10月1日現在）合計983名（正会員552名　賛助会員431名）

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年4回この会報誌と年次報告書をお届けします。
入会のお申し込みや、会員の方の住所変更などは会員担当の宮西まで。

メールアドレス　miyanishi@ngo-jvc.net

- 一般会員　10,000円
- 学生会員　5,000円
- 団体会員　30,000円

それぞれに
正会員と賛助会員があります

JVCのオリエンテーション（説明会）にお越しください

JVCの活動内容をご紹介しています。
お気軽にご参加ください。［事前にご予約ください］

会　場　JVC東京事務所　参加費　無料

第1月曜日　午後7:00〜8:30
第4土曜日　午後2:00〜3:30

ウェブサイト　http://www.ngo-jvc.net/　メールアドレス　info@ngo-jvc.net　Facebook NGOJVC　twitter @ngo_jvc

◎発行 ＝ 日本国際ボランティアセンター（JVC）　〒110-8605 東京都台東区上野5-3-4 クリエイティブOne秋葉原ビル6F TEL 03-3834-2388 FAX 03-3835-0519
◎発行人 ＝ 今井高樹　◎編集人 ＝ 大野和興・長谷部貴俊　◎編集スタッフ ＝ 樫田秀樹・細野純也
◎デザイン ＝ 渡部健　◎印刷 ＝ 株式会社ベスト・プリンティング

本誌の記事・写真などの無断転載・複写を禁じます。